

山梨県北都留郡小菅村におけるマメ科作物の研究

A study on legumes in Kosuge, Yamanashi Prefecture.

渋谷 昌文 (Masafumi SHIBUYA)

ヒトと植物とは古来より密接な関係にあり、その盛衰において相互に影響しあってきた。このヒトと植物の間で育まれてきたのが農耕であり、栽培植物である。中尾(1966)によれば、長きに渡るヒトと植物の関係の結晶である栽培植物は生きている文化財ともいえる。

本研究は日本でも古くから栽培されてきたマメ科植物に注目した。マメ科植物は栄養価、保存性に富むだけでなく、共生する根粒菌が窒素固定を行うことから畑を肥やす作物としても広く栽培されてきた。

今回調査地とした山梨県北都留郡小菅村(以下その結果 13 件 23 人の村民に聞き取り調査を行うことができた。質問紙調査では 315 通中 84 通の有効な回答を得る事ができた(有効回答率=26.7%)。これらの結果からマメ科作物は小菅村の人々にとっては育てやすく、よく食べられている非常に身近な作物である事が分かった。

特に聞き取り調査ではダイズとインゲンマメに関して詳細な記録をとる事ができた。そこからインゲンマメは長期間、新鮮な食べ物を得られるように、ダイズは味噌を作るために栽培されている事が明らかになった。またマメ科作物と他の作物との間作といった少ない畑を効率的に利用する智慧や、身の回りに生えている植物を利用した農耕の手法が存在していた。

小菅村では畑に適した土地も少なく、気温が低いいため冬の間は畑仕事ができない。これらの厳しい「自然環境による制約」の中で農耕が営まれてきたからこそ、制約と上手に付き合う工夫が考え出され、その智慧を蓄積・伝承させてきたといえる。

現在、小菅村では過疎・高齢化が進んできており、担い手不足から伝統的な智慧と貴重な在来種を継承していく事が困難になりつつある。しかしながら今回のマメ科作物の調査で記録することができたような、厳しい自然環境の中で培われた智慧を記録していく事は、持続可能な社会を目指すうえで必要不可欠である。

小菅村)では、そのマメ科作物の在来種が存在している。しかし小菅村では過疎化の進行と共に畑仕事をやる人が少なくなってしまうっており、貴重な栽培作物とそれらにまつわる智慧の喪失が進みつつある。

よって本研究では小菅村におけるマメ科の作物の栽培と利用について調査を行い、その伝統的智慧を記録することを目的とした。並びに何故小菅村においてマメ科作物が栽培され続けられてきたのか、村民にとっての位置づけを探ることを目的とした。研究方法は直接面接式の聞き取り調査と、小菅村全戸への郵送法での質問紙調査であった。

4月 | 5月 | 6月 | 7月 | 8月 | 9月 | 10月 | 11月

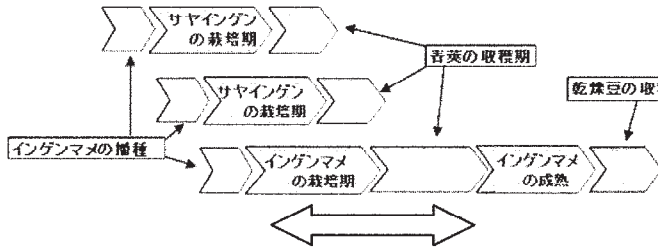
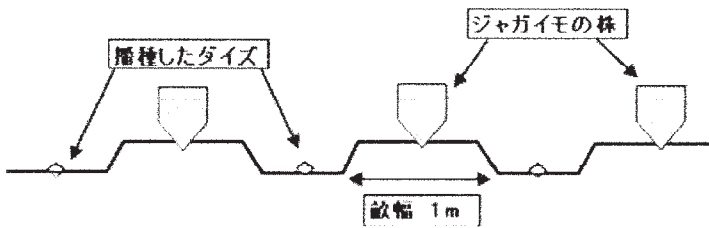


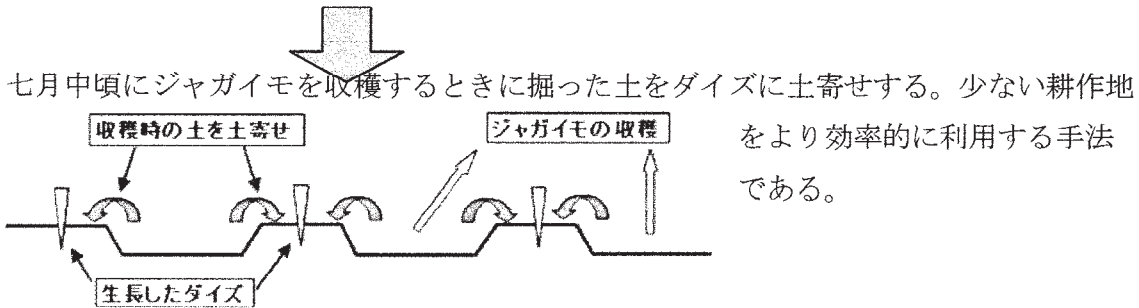
図1. インゲンマメの栽培図

インゲンマメを複数回に分けて植えることで、新鮮な青莢を長期間にわたって得ることができる。

図2. ダイズの間作



ジャガイモを植える時に畝幅を広めにとっておき、6月中旬頃ダイズの播種を行う。(上図)



七月中頃にジャガイモを収穫するとき掘った土をダイズに土寄せする。少ない耕作地をより効率的に利用する手法である。

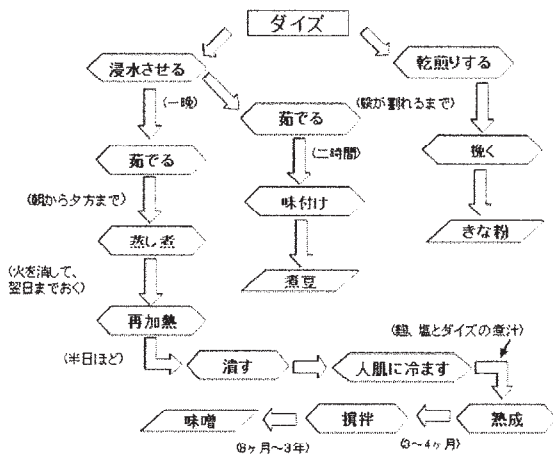


図3. ダイズの加工図

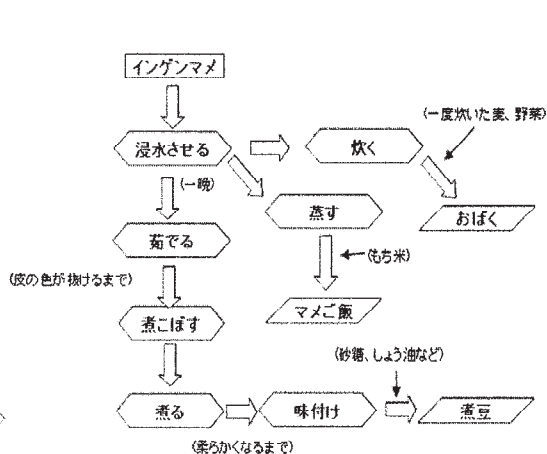


図4. インゲンマメの加工図